MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

# ミステリ読書案内

２０２３．１．６　発行元
第 434 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

# 最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から４冊を紹介する。今回もシリーズものの最新刊を取り上げた。いずれも文庫本。気軽に買うことができ、気軽に読めるのがなにより。安心して読めることが有難い。

## 50年後にも残る本？

今から５０年後のことを考えた時に、私が今紹介している新刊本の中でどれほどのものが生き残っていくのだろうか。５０年後に再刊されたり、評論などに取りあげられたりするものはかなり少ないものと想像する。特にライト系の作品は１０年も待たずに消え去るのだろうなと思う。現在は新しいものを求めて新作が出過ぎ状態。

５０年後に紙の本がどれほど流通しているかは私に予測はできないが、「電子版」にしてもまったく利用者がいない作品は消去してしまうのではないだろうか。書店も紙の本もずっと残っていてほしいものだ。図書館でも本の実物が並んでいることが大切だ。

今回取り上げた４作品の中に歴史に残る「傑作」と呼べるようなものは入っていない。時間の流れとともに他の多くの作品の中に埋もれるようにして目立たない存在になっていくのだと思うが、それにしても長く生き延びてほしいと願う。本が大切にされる世を願う。

## 碧野圭『菜の花食堂のささやかな事件簿　木曜日のカフェタイム』

１０月にだいわ文庫から出た本。シリーズ５冊目になる。菜の花食堂のオーナー・下河辺靖子先生は謎解きの名人。野菜たっぷりの料理を作る一方、来客たちが持ち込む日常の謎に解決を与えてくれる。料理を習いながら店の手伝いをしている館林優希の目を通して語られる。同僚の香奈さんに加えて今回は新しいスタッフが加わる。小学四年生の奏太くん。シングルマザーの母親の帰りが遅いので、菜の花食堂で簡単な料理を教えてもらい、仕事を手伝いながら夕食を共にする。この奏太くん絡みの展開が本書の柱。木曜日に決まってやってくるようになった男性の動きが怪しく見えて…。

## 加藤実秋『警視庁アウトサイダー The second act1』

１１月に角川文庫から出た本。シリーズ４冊目だが、本書から第二段階に入った。警察学校を出たばかりの水木直央が桜町中央署刑事課に配属され、蓮見・架川班に加わることになり、新しいスタートを切ることに。直央の視点で描かれている部分が多い。新人刑事から見て、蓮見・架川コンビはどのように見えるのか…。

直央は警察学校の卒業式から殺人現場に直行で連れていかれる。路上に倒れている若い男の死体。どうやら強く圧迫されて呼吸が止められたような状態。すぐに身許は判明し、友人らしき人物を訪ねるが…。蓮見・架川の型破りの捜査に巻き込まれて直央は苦労の連続。でも徐々に蓮見・架川の裏に隠されているものに疑念が…。

## 高里椎奈『雨宮兄弟の骨董事件簿』

１１月に角川文庫から出た本。『うちの執事シリーズ』『私立シードゥス学院シリーズ』に続く第三のシリーズになるのか。前シリーズに比べると脇役が警察官・刑事なので、ずっとミステリらしい仕上がり。主人公は骨董店を開いている雨宮陽人とその弟の海星。陽人は骨董の知識が豊富で、明るく活動的。海星は病弱で家から外に出ることが出来ないけれども、真贋を見分ける特殊な能力を持っている。この兄弟を何かにと気にかけてくれるのが刑事の本木匡士。店に持ち込まれた品物や、事件に付随した品物を調べることで、隠された謎を解き明かしていく。

## 山本巧次『大江戸科学捜査八丁堀のおゆう 司法解剖には解体新書を』

１１月に宝島社文庫から出た本。シリーズ９冊目。前作に引き続き現在の方の東京はコロナ禍にあり、２００年前の江戸時代に行くためにはＰＣＲ検査が必要な状況。「おゆう」は江戸で過ごす時間の方が多くなりつつあるようだ。今回のテーマは「解体新書」。杉田玄白よりは少し後の設定なので、私の住んでいる郷土の先人である蘭学者の大槻玄沢が登場。重要な役割に使ってもらって有難いことだ。

十手持ちの女親分おゆう（関口優佳）と定廻り同心の鵜飼伝三郎は南町奉行所に呼ばれ、内々の調べを依頼される。元長崎奉行の配下の河村右馬介が心の臓の発作で亡くなった件である。その少し前には唐物商の平戸屋が同様の症状で亡くなっているという。毒物による殺人が疑われ…。現代であればすぐに司法解剖になるのだが、江戸時代では無理。おゆうは秘密裏に「腑分け」を考えるのだが…。現代の分析オタク・宇田川も乗り出してきて事件の解明に当たる。捜査はやがて大事になり……。